

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2690600032		
法人名	医療法人 三幸会		
事業所名	ケアサポートセンター宝ヶ池		
所在地	京都市左京区上高野薩田町11-1		
自己評価作成日	令和元年6月19日	評価結果市町村受理日	令和元年9月13日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/26/index.php?action=kouhvu_detail_022_kani=true&JigyosyoCd=2690600032-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人 京都ボランティア協会
所在地	〒600-8127 京都市左京区西木屋町通上ノ口上ル梅湊町83-1「ひと・まち交流館 京都」1階
訪問調査日	令和元年7月9日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者1人ひとりの思いに寄り添い、「笑顔」で過ごして頂けるように努めています。認知症になって自宅では生活出来なくなっても、家族との関係を断ち切ることなく、スタッフと家族が共に支えることが出来る事業所を目指しています。家族の面会も多く、一緒に活動に参加することもあります。家族も含めて「宝ヶ池」という大家族のような存在になれるように努めています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ケアサポートセンター宝ヶ池(グループホーム9名、小規模多機能ホーム登録25名)は開設から12年目を迎えています。2年前に見直しをおこなった理念1.ご利用者、ご家族との信頼関係を大事に事業所でも自宅でも安心して過ごして頂けるように努めます。2.ご利用者の思いを大切に、毎日を笑顔で過ごしてもらえるよう努めます。は、パンフレットや広報紙に載せ公表しています。職員は利用者一人ひとりの思いに寄り添うため、利用者個々の生活史や生活スタイルを受け止め、日常生活の中では笑顔を引き出す声かけや対応を実践しています。家族の面会時には職員から声をかけ状況の説明をおこなっており、職員の対応には家族から感謝の言葉があります。管理者は、職員全員に外部研修への参加も奨励し達成しています。今期実践者研修に2名参加の予定です。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	基本理念は「信頼関係」と「笑顔」であり、利用者だけでなく家族との信頼関係を深めるように、職員から積極的に情報を発信しコミュニケーションの充実を図っている。利用者、家族、職員のすべてが笑顔で過ごせるように支援しています。	理念に基づき「信頼関係」は、毎日の利用者や家族との関わり、面会時のやりとりやお便りを送り利用者の様子を随時伝えるなどで築いている。また、「笑顔」をケアの中で引き出しているか、一人ひとりの思いに寄り添っているかなど、カンファレンスで検討しながら実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会に入り、地藏盆や区民運動会に利用者と職員で参加している。地域の保育園との交流や中学生のチャレンジ体験も受け入れている。また、合唱やギターレクに地域の方がボランティアで来て下さっている。	町内会に参加し、地藏盆や区民運動会に参加している。近隣の保育園児の来訪(年4回)では、日頃会話が少ない利用者も多弁になり、とても喜ばれている。中学生の職場体験学習も受け入れている。フラワーセラピーとして生け花(月2回)を継続している。ボランティアは合唱やギター演奏、南京玉すだれなどで来所がある。職員は地区社協主催の「すこやか学級」や地域包括支援センター主催の「オレンジカフェ」に参画して地域に貢献している。近隣住人との交流は少ない。	お元気な利用者は、老人会や女性会の催し、地域の清掃活動など参加できないか検討を期待したい。利用者が出かけることで地域の方の来所も可能になり、交流の成果で運営推進会議の地域メンバーの増員や消防訓練への参加などに繋げていかれることを望む。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	岩倉、上高野の地域ケア会議に参加し、徘徊訓練の参加をしている。地域の小学校で認知症講座のお手伝いもしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	自治会長、地域支援包括センターの担当者、家族の代表、地域の方等のメンバーにより2か月に1回開催している。困難事例や事故報告時の対応についての助言をもらったりしている。また、地域のボランティアの紹介もしてもらっている。	会議は小規模多機能事業所と合同でおこなっている。職員以外の参加者は家族代表1名、自治会長・地域包括支援センター職員である。入居者の近況やリスク管理報告、イベントや職員研修の実施報告がある。委員からは、地域の近況報告、ケア業務へのアドバイスがある。委員の提案を受け、錠剤を落としてしまう利用者への対策を薬剤師と相談し、薬剤の改善をおこなった。会議は家族に案内して、議事録は送付している。	会議は小規模多機能事業所との合同会議である。会議メンバーの地域代表、家族、利用者の参加者を増やす努力を継続し、より多くの地域情報や提供する各種サービスに対する評価や意見を得ることを期待する。

京都府 ケアサポートセンター宝ヶ池

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	左京区の介護保険事業者連絡会に参加している。意見交換をするなど協力関係が築けるように努めている。また、地域包括支援センターの職員には運営推進会議に毎回参加してもらっている。	左京区介護保険担当者とは、必要に合わせ報告や相談など連携はしている。同区の介護保険事業者連絡会は、今まで小規模の管理者からの報告であったが、次回から交代で参加することが決まっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人として身体拘束防止マニュアルを作成し、職員全員に開示している。事業所としては、外部の研修にも参加して、伝達研修を行っている。日中の玄関の施錠は行っていない。	事業所内研修は年2回実施している。管理者は、職員に外部研修も奨励し、伝達講習で拘束をしないケアの周知徹底に努めている。夕方になると「帰りたい」と訴える方、不安の訴えの多い方など、カンファレンスで気を紛らわす方法など具体的に検討して実施している。スピーチロックには注意を払い、やさしくおだやかな声かけ誘導を心掛けている。玄関の施錠はしていない。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束同様、マニュアルの作成、開示。年1回のペースで研修を実施。外部研修にも参加している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人内で研修を行っている。昨年度は事業所において成年後見制度のセミナーを講師を招いて開催した。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は時間をかけて行い、各項目に対して細かく説明。不明点が無いかを確認し、安心して契約をしてもらっている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時や家族会等で、家族からの意見や要望も聞くようにしている。問題点については、すぐに改善する取り組みを行っている。	利用者から日々のケアのなかで聞き取った意見や要望は、経過観察記録に残し、申し送っている。家族の面会時には、職員から声かけをして近況を説明するとともに、意見や要望を聞き取っている。年1回の家族会は、ほぼ全員の家族、職員が出席し親交を深めている。面会時の職員の対応には家族から感謝の言葉がある。家族会からの声をもとに業務改善に繋がった案件は特にない。	

京都府 ケアサポートセンター宝ヶ池

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月1回職員会議を実施し、業務やケアについて職員同士の意見交換を行っている。なるべくすべての職員が参加出来るように2回開催することもある。会議後は議事録を作成し、全職員に周知している。	申し送り、カンファレンス、職員会議、個人面談(年2回)などで、職員は各自の考え、意見などを自由に述べる事ができる。職員からの提案で早出、遅出の業務内容の見直しをおこない、成果を上げている。出席できない職員からは事前に議題提出や意見を得ている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人として賞与や処遇改善費用のお知らせや説明会を実施している。また、人事担当者とは面談も適宜行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の経験やスキルに応じた研修に参加できるようにしている。介護福祉士やケアマネジャー資格取得については支援制度がある。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	岩倉や上高野の地域ケア会議、医師会主催の研修に参加している。また、外部研修を通じて他の事業所職員との交流もある。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	面接は時間をかけて行い、本人の思いや、維持されて能力の把握に努めている。安心を確保できるように、早い段階での信頼関係構築に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人の意向確認と並行して家族の意向確認も行っている、本人への思いや家族状況等を把握し事業所として対応できることを提案している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人の思いや家族の思いをしっかりと聞き取り、また本人の身体機能や精神機能を総合的に判断した上で、適切な支援を行うように努めている。		

京都府 ケアサポートセンター宝ヶ池

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員全員が大きな意味での家族として、本人の支援を行い、介護するもの、されるものとならないように心掛けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	事業所での様子を、月一回のお便りや面会時に報告し職員との信頼関係や連携が取れるようにしている。また、家族にも出来る限り面会をお願いしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族以外に親戚や友人の面会もあり、居室でゆっくりと過ごしてもらえるようにしている。また、家族にも一緒に外食や外出の機会を持てるようにお願いしている。	親戚の方や友人の訪問、家人との外食や馴染みの美容院に行くなど継続されている。職員は利用者個々に特別な外出支援はできていないが、ドライブ中に自宅付近や懐かしく話していた場所など選ぶように通っている。趣味の継続は少なくなっており、裁縫の得意な方に三角巾を作ってもらっている。利用者のできること(洗濯物たたみ、ぬり絵、貼り絵など)に着目して支援している。担当の介護職員は、毎月家族にカラー写真とお便りを送り、暮らしぶりや日常の様子を届けている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	現在女性9名が入居しており、日々、仲良く和気あいあいとした雰囲気の中で過ごしている。皆で一緒に洗濯物を畳んだり、壁に飾る作品作りなど、利用者同士で協力して行っている場面がみられる。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了後もしくはばらくは電話連絡をするなど困ったことがあればいつでも相談してもらえる関係作りを心掛けている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人、家族から生活歴や好み、ここでの暮らし方について希望を聞き取り、職員同士でも意見交換を行い、必要なサービスの提供に努めている。	入居時は本人や家族、担当していた介護支援専門員などから情報を得ている。家族面会時は職員から積極的に声かけをおこない、希望や意見を聞き取るようにしている。利用者や家族から聞き取った内容は、経過観察記録に残しカンファレンスで検討している。「おしゃれな服を着てほしい」「毎日がえてほしい」などの家族の要望もかなえている。また、食事の咀嚼や嚥下の低下にあわせ、食事メニューの検討を家族とともにこなっている。	

京都府 ケアサポートセンター宝ヶ池

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	面接時に本人や家族から聞き取りを行っている。また、入居前にサービスを利用されていた場合には、担当のケアマネジャーや相談員から情報の提供をしてもらっている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	常に最新の情報収集に努め、職員との意見交換も行い、必要なサービスの提供を心掛けている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日常的に利用者、家族から情報収集を行い、必要なサービスの提供を出来るようにしている。定期的なカンファレンスで、職員同士の意見交換も行い、現状に即した介護計画を作成している。	施設アセスメント表MDS2.1で情報収集をおこない、年1回更新している。6か月ごとにモニタリングとサービス担当者会議も実施している。事前に利用者と家族に意向の確認をおこなっているが会議への参加はない。また、モニタリング時に継続するとして理由の記載が乏しい。カンファレンスは必要に合わせ適宜おこなっている。	モニタリング表を使用して介護課題の評価をおこなっている。職員で話し合った課題の中止、変更、継続の内容を、もう少し記録すると根拠が明確になり振り返りに役立つのではないかと。検討を期待する。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	経過観察記録に「気づき」の欄を作っており、職員の気づきを記入出来るようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者、家族の意向を聞き取り、職員同士が連携し、日々の変化に対応できるように心掛け、固定観念に捉われないサービスを行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の店舗での買い物や、ランチを楽しんでいる。地域の保育園や児童館との交流もある。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居前からのかかりつけ医に定期定期に往診をお願いしている。また、家族の希望により、定期受診をされている方もある。かかりつけ医のいない方には往診対応できる医師を紹介している。	入所以前からのかかりつけ医の継続者は3人おられ、内1人は定期的に受診している。夜間往診はできないが、電話相談はできる。内科以外に訪問看護(週1回)があり、希望により歯科医やリハビリテーションの往診を受けており、診療記録がある。看護師とは24時間電話で相談ができ、必要時は臨時訪問もある。夜間の緊急受診は、利用者や家族の希望病院を優先するが、救急車の対応にゆだねている。	

京都府 ケアサポートセンター宝ヶ池

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回、訪問看護師の訪問があり健康管理をしてもらっている。体調不良等異変があれば、電話にて対応。必要時は訪問してもらっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時にはサマリーを送ったり、電話にて情報提供を行っている。面会や電話連絡により状態の確認や情報交換を行っており、可能な限り退院前カンファレンスにも参加している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時に重度化・ターミナルケア対応について話をしている。体調に変化があった時には医師も同席し、状態の説明をもらい今後について話し合うようにしている。	契約時に利用者と家族に「重度化対応・終末期ケア対応指針」に沿って説明し、事業所として看取りをおこなう姿勢を表明している。現在要介護5の方もおられるが、看取りの対象ではない。職員は、看取りに関する事業所内研修や外部研修に参加して心構えや技術の習得など継続している。かかりつけ医や訪問看護師との連携体制はできている。看取りの実績はない。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救急救命やAEDの使い方講習を年1回行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の消防訓練を実施している。自然災害(地震発生時)の対応や、夜間想定避難訓練では2階からの避難方法をシュミレーションし、実際に避難誘導する訓練をしている。	防災訓練は消防署立会いの下、1階の小規模多機能事業所と合同で、日中や夜間を想定して年2回おこなっている。地震発生時の対応(机の下に入り頭をかくす、クッションで頭を覆う)なども利用者とともに実施している。また、2階から階段を使って利用者を避難させる訓練もおこなった。職員間で「安否確認システム」を導入している。職員は年1回、AEDの使用法を含む救命講習を受けている。声かけはしているが地元消防団や地域の方の参加は得られていない。備蓄は水や食料を半月分準備している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者の性格や認知症の進行に合わせた声掛けを心掛けている。利用者に対する言葉使いや態度についての事業所内の勉強会も行っている。	職員は「利用者個々の生活してきたスタイルやリズムを受け入れるようにしています」と述べている。利用者の呼び方は入所前に呼ばれていた呼び方を継続している。特にトイレ介助については細かく検討して統一している。同性介護の希望者はいない。接遇やプライバシー保護、コミュニケーションの研修に参加し、学びを実践に生かし「楽しい会話、食べたくなるような声かけ、なごみのある生活」に努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	話しやすい雰囲気作りを心掛けている。本人の性格や嗜好を考慮して、少ない選択肢の中から選んでもらうなど質問の方法を工夫している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務のスケジュールはあるが、日々の活動については無理強いはしない。本人のペースを大事にしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人の好みの服装やおしゃれを楽しんでもらえるように、家族にも協力をお願いしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者の好みを考慮しながら、肉、魚、野菜などバランスよく摂れるようにしている。それぞれの能力に応じて、調理や取り分けに参加してもらっている。	材料はスーパーから届く。食事の献立は食事メニュー担当者が、小規模多機能事業所の担当職員とともに作成している。検食簿を毎日記入しており、利用者の好みや希望など参考にしている。七夕にはソーメン、土用のウナギなど季節感も取り入れている。調理は利用者とともにおこない、それぞれにできることで参加している。誕生日は手作りケーキで祝い、利用者の希望で外食蕎麦に全員で出かけたり、喫茶店に行っている。食事は全員食堂で職員とともに摂り、職員の介助する姿や声かけがある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量、水分量を記録し、日々の摂取量を把握している。それぞれの状態に合わせ食事形態での提供を行っている。		

京都府 ケアサポートセンター宝ヶ池

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアを実施している。介助が必要な方は職員がブラッシングを行っている。必要に応じて歯科医師による口腔ケアを実施している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を活用し、排泄パターンの把握に努めそれぞれのパターンに応じたトイレ誘導を行っている。安易なオムツ使用は避け、出来る限りトイレで排泄できるように支援している。	排泄チェック表をつけ、利用者個々の排泄パターンの把握に努めている。昼間は、声かけや誘導で全員がトイレでの排泄である。夜間はポータブルトイレの利用者もいる。できる事は本人でおこなう方針で介助をしており、布パンツ使用者は約半数である。紙おむつ使用者はいない。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分量の確保と運動などで自然な排便コントロールが出来るようにしている。排便状況は記録し、下剤による排便コントロールも行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週2回のペースで入浴していただいている。利用者ごとに曜日は決めているが、その日の体調等を考慮して臨機応変に対応している。	入浴回数は週2回を基本としておこない、必要に合わせシャワーや清拭に対応している。湯温は利用者の好みで調節している。入浴を拒否される方には、本人が興味を示す声かけで誘導しており、入浴後は「気持ちが良い」との言葉がある。入浴剤は使用していないが、ゆず湯は楽しんでいる。同性介助の希望者はいない。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人の体調や希望に応じて、居室で休息してもらう時間を設けている。また、日中はなるべく活動的に過ごしてもらい夜間は安眠できるように心掛けている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬情報をファイリングして、全職員がいつでも確認できるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	趣味や家事など、好きなこと、出来ることを把握しそれぞれの得意分野で力を発揮できるようにしている。		

京都府 ケアサポートセンター宝ヶ池

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	花見や紅葉狩りなどイベントとしてのドライブや外出のほか、本人の希望により近くのお店でランチをしたりしている。また、ご家族の協力により一緒に外出や外食を楽しんでもらっている。	日常的には短時間であるが散歩をしており、車椅子の方も外気に触れている。利用者の希望で外食や喫茶店に全員で行く機会をもうけている。他に、花見や紅葉ドライブがある。本人の希望によっては家族に依頼し、一緒に外出を楽しんでいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	買い物の希望があれば、事業所の立替により買い物に行ったり、コンビニでコーヒーを飲んだりしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があれば電話の取次ぎもしている。手紙のやり取りも希望があれば対応している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節感を感じてもらえるように、季節に応じた飾りつけを、利用者と職員で制作し飾っている。	リビングはテーブルと椅子があり、少し離してソファ2台を設置して、くつろぎのスペースを確保している。食後にはソファに座り憩う利用者の姿がある。壁に七夕飾り、紫陽花に蛙や傘のはり絵など、利用者の作品があり季節を感じることができる。何月か答えられない利用者も、七夕飾りや紫陽花を見て「7月」と答えている。掃除は毎日職員がおこない清潔である。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	気の合うもの同士で座るテーブルの配置になっている。リビングにはソファやテレビを設置し利用者が思い思いに過ごすように工夫している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人や家族と相談し、馴染みのある家具を使用していただいている。居室内の飾りも、本人や家族の好みで配置している。	居室は入口にフローリングスペースがあり、6畳敷きにベッドが設置してある。押入れが大きく日用品や衣類を衣装ケースで整理して、畳の空間が広くとってある。自作の能面や風景画、家族写真や華道の免許証、仏壇など、それぞれの思い出に包まれている。フラワーセラピーの生花にも個性がある。清掃は職員と利用者が一緒に毎日行っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	バリアフリー対応になっており、利用者が安全に自立して生活ができるように配慮している。		